

6 オランダ製壁掛け世界地図と地図屏風

三 好 唯 義

Tadayoshi MIYOSHI

はじめに

16 世紀中頃から江戸時代を通じて、日本人は西洋製地図を受け入れる。その際に、オランダ製の壁掛け地図とそれを模写した日本製地図屏風との関係は、極めて密接で興味深いものがある。つまり、日本人が描いた地図屏風には、原本に忠実に従った部分とそうでない部分（例えば日本列島周辺部分の改変）が見られ、地図を媒体とした東西文化交流の過程が刻み込まれている。

本稿では宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵される『万国絵図屏風』（153 頁、写真）を基に、それらの例を挙げ考察したい。『万国絵図屏風』は片隻に世界図と人物図を、もう一方隻に王侯図と都市図を描くもので、美術史学界においては近世初頭を代表する南蛮美術作品、初期洋風画の傑作として広く知られている¹⁾。また、画題が地図であるために、地理学の分野においてもその原図を探る努力が秋岡武次郎、中村拓などの古地図研究者によってなされた。それら先学の業績に基づき、新たな功績を挙げたのが美術史家の鴫田忠正である²⁾。彼が 1974 年に『長崎談叢』に発表した論文で、『万国絵図屏風』と 17 世紀初頭にアムステルダムで刊行されたメルカトル図法による壁掛け世界地図との関係が指摘されたのであった。あわせてその後、室賀信夫や高橋正、オランダの G. シルダールなどの研究が進み、現在ではその原図がほぼ解明された³⁾。その原図とは P. カエリウス 1609 年版世界地図という壁掛け地図であり、その地図自体は現存していないものの、既存の研究成果によって復元されるものである。しかし、それを基に『万国絵図屏風』との比較検討が可能であり、地図を媒体とした文化交流、ならびに知識の受容と変容が考察できる格好の素材である。

本稿では、日本人作成の地図屏風を東西文化交流の証しとみなし、それらから読み取れること、あわせてオランダ製壁掛け地図の重要性を指摘したい。

1 西洋製世界地図との接触

1.1 16世紀後半の接触

日本と西洋との交流は16世紀中頃から始まる。1543年（天文12）、中国船に乗ったポルトガル人が九州種子島に漂着した。この歴史的な事件を西洋世界の側から見た場合は「日本の発見」だが、日本の側から見るとは西洋との交流の開始である。これ以降に、鉄砲やキリスト教など文物の受容が始まるわけだが、ヨーロッパからもたらされた地図を見て、新たな世界を発見したことは、特に地理思想上においての意義がある。そこに描かれていた世界の姿は、日本人が有していた伝統的な世界観・世界図とはまったくかけ離れたものであったからである。

では、16世紀後半に日本へ伝わり、人びとが見た西洋製世界地図とはどのようなものであったのだろうか。

西洋の地理学史では、15世紀にプトレマイオスの地理書と地図が復活してから以後、コロンブスなどの探検航海を経て、世界地図が大きく変化する。地図史の上では、16世紀後半は地図投影法の進歩・地図出版の隆盛・プトレマイオスの地理書と地図からの脱却といったことから、近代地図学の開始期と考えられている。そして、地球規模で地理知識を獲得し現在につながる世界地図が描かれるようになるのである。ヨーロッパの地図学にとって「日本の発見」は、プトレマイオスの地図において不明であったアジアの東端を確定できたことであり、重要な意味を持つ。

そういった近代地図学開始期の地図や地球儀が、おそらくポルトガル人の航海者や商人、イエズス会宣教師などの手で日本にもたらされたはずである。しかし、1600年に九州豊後に漂着したリーフデ号に積まれていたという海図が東京国立博物館に所蔵されているものの⁴⁾、それ以外には当時ヨーロッパから伝わった地図で現存するものは無い。

一方、史料の上では織田信長が地球儀を見たこと、またオルテリウスの世界地図帳『世界の舞台 THEATRUM ORBIS TERRARUM』（1570年初版）が日本にもたらされたことが記されている。天正遣欧使節（1582～90年）に現地を手渡されたこと、さらに彼等が帰国した際の土産物にその名が記録されているのである⁵⁾。

『世界の舞台』は当時の最新最良の地図を集成し編纂した地図帳であり、そこにはスタンダードな地理知識が表現されていると考えることができる。よって、16世紀後半に日本人が見た世界の姿とは『世界の舞台』の巻頭を飾る図、もしくは仮に他の世界

地図であったとしても、その姿は大きく違わないはずである。

では実際に、日本人の世界地図受け入れの証拠はどのようなものであるのか。つまり西洋製地図に基づく日本人作世界図だが、それは種子島より半世紀後の16世紀末期になってあらわれる。

1.2 16世紀末期の日本製地図屏風

西洋製地図に基づく日本人作世界図のうち、最も古いものは16世紀末に作成されたと考えられるものがあるが、日本図と世界図が一双となった屏風（福井市浄得寺所蔵、重要文化財）がつとに知られる。その世界図屏風にはイベリア半島を起点とする航路線がひかれており、大陸内部の河川や湖は誇張した表現で描かれる。これらのことから『世界の舞台』にある地図そのものではなく、ポルトガル製の世界地図が手本になったのだと思われる⁶⁾。また、北海道にあたる「夷」島と朝鮮半島が明瞭に描かれ、その北側には豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に認知されたという地名「オランカイ」が記されている。

対になっている屏風には日本図が描かれている。この日本図は後述するようにわが国の地図史において重要な位置を占めるが、特に注目しなければならないことは、九州に三つの丸印で都市が示されていることである。それらは博多（赤丸）、名越（肥前名護屋、白丸）、長崎（緑丸）である。肥前名護屋からは朝鮮半島への航路を意味する朱線が引かれている。日本史全体を見ても、肥前名護屋が日本列島を描く図の中で三つしか印されない都市の一つに選ばれることなど、秀吉の朝鮮出兵（1592年）の時期以外には考えられない。

以上のようなことから、この屏風の制作年代が16世紀末期と特定されるが、そうであるならば、西洋ならびに日本における地図発達史の上で、次に記すような重大な問題を有することになる。

屏風全体に描かれた日本図は、海岸線の出入りが複雑に表現され、北海道の一部も見えている。また富士山が明確に描かれているが、その姿が日本地図の上で存在するものとしては最古のものである。また、東北地方には大きな山脈が描かれ、竹生島と思われる島がある琵琶湖からは淀川が流れ出し、河口は三角州を形成し金泥で着色されている。おそらく、大坂を表現しているのだろう。前述したように九州には三つの都市がマークされ、鹿児島湾の描写とあわせて全体の姿は整っている。それ以前の時代に描かれた日本図は「行基図」と総称される単純な姿をしたもので、この屏風に描かれた日本図は地図的に格段に進歩したもので、つまり豊富な地理情報が読み取れるの

である。

片方の世界図の方は、日本列島を東アジア地域に位置づけている。朝鮮半島と日本海、ならびに北海道が明確に描かれているが、このような東アジア地域像は西洋の世界地図においては16世紀末期はもちろん17世紀末期においても描かれていない。たとえば、ヨーロッパでは17世紀後半においても朝鮮半島が島として表現されていたりする。つまりはヨーロッパより進んだ地図作成事業がアジアにおいて独自に為されていたことを想定しなければならないことになる。

このような16世紀末期に見られる地図の画期については、かねて中村拓と岡本良知に代表される二通りの考え方からの論争があった。中村拓がいう戦国日本図と、岡本良知がいうイエズス会新図である⁷⁾。

前者は日本人が独自に作成した、いわゆる行基図とは異なる、大型詳細な日本総図がすでに存在し、それが利用されていたと考えるものである。たしかに群雄割拠で国々を切り取りあっていた戦国時代において、日本全図ならびに個々の地の詳細な地図が存在したことは想定できうる。一方、後者は安土桃山時代に日本図の一大変化があったとするもので、豊臣秀吉による検地や国郡図と関係する図であるとか、当時来日したイエズス会宣教師の影響で作成された図がそれであると主張する。

それぞれの持論から、浄得寺所蔵の地図屏風やテイセラ日本図（1595年）といった、16世紀末期に日欧で作成された日本図の進歩性を説明するが、それを裏付ける原図は存在しないため、どちらが正しいとの結論はもちろん出ていない。ただ、日本列島を東アジア地域の中で位置づけること、山東半島や朝鮮半島の姿を描くこと等々は、日本人のみの方では不可能であろう。海外との文化交流と影響において達成されたと理解するのが、より蓋然性が高いといえる。

2 オランダ製壁掛け地図の影響

17世紀前半には、イエズス会の絵画教育を受けた日本人絵師（いわゆるイエズス会画派）の手になる豪華絢爛な地図屏風が生み出される。その手本の世界地図は、アムステルダムで刊行されたW.ブラウの1606/07年世界地図を、さらに1609年に改訂したP.カエリウス世界地図という大型壁掛け地図であり、地図屏風の作成年代は当然にそれ以降となる。

そこから生み出された地図屏風は3例あり、『万国絵図屏風』（宮内庁三の丸尚蔵館、以下「宮内庁本」）、『レパント戦闘図世界地図屏風』（香雪美術館、以下「香雪本」）、

『四都図世界図屏風』（神戸市立博物館、以下「神戸本」）である。世界図を描いた屏風と対になるのは、都市図や戦鬪図といった異国情緒あふれる画題を描いたものである。またさらに、そのオランダ製壁掛け地図の周辺装飾画は、初期洋風画の傑作『泰西王侯騎馬図』（神戸市立博物館、サントリー美術館）をも別に生み出している。これらは日本美術史上の重要作品としてかねてより注目されてきたが、原本の判明とその相互比較から、わが国における地理思想史ならびに地図発達史においても特別な存在であることを認めなければならない。

2.1 フェルメールに見る壁掛け地図

17世紀のオランダで作製された壁掛け地図を知るには、フェルメールの絵画作品が格好の材料となる。フェルメールは寡作な画家として知られ、その作品数は35点とか36点といわれるが、9点に壁掛け地図や地球儀、天球儀などが登場する。

最もよく知られているのは『画家のアトリエ』（ウィーン美術史美術館蔵）だが、他にも『兵士と笑う娘』や『手紙を読む青衣の女』、『リュートを弾く女』等にも、その背景の壁に地図が掛かっている。しかもその細部までが丁寧に描写されており、フェルメール作品によってその存在が証明される地図があるなど、地図学への貢献も大きい。また地球儀（『信仰の寓意』『地理学者』）や天球儀（『天文学者』）、コンパスなどの関係器具類も精密に描写されている⁸⁾。

地図の歴史を語る者にとって、オランダにおける地図学の隆盛を説明する際に、フェルメールの絵画作品を出すことは常套手段である。彼が描く地図をテーマにした論文や著作は欧米に多く、日本においては織田武雄が紹介している⁹⁾。

全作品の4分の1に地図が出てくるということは、フェルメール自身が地図を好んだということ、さらに当時は地図が人気が高く、かつ日常的な存在だったらしいと考えることができるだろう。事実、作品中に地図を描いている画家はフェルメールだけに限らない。ただ、地図へのこだわりという点では彼が一番強いのではないか。

たとえば『兵士と笑う娘』『手紙を読む青衣の女』『恋文』の三作品には同じ地図（「オランダならびに西フリースラント図」）が描かれている。『恋文』にいたっては手前の暗い室内にほのかに見える程度であるが、やはり壁にはこの地図が掛かっている。フェルメールにとっては格別な存在であったようだ。

このオランダ図は初版が1620年に刊行され、翌年には著作権がブラウ家に移り以後何度か再版されたが、現在では西フリース博物館（ホールン）に保存されている一点だけが知られる。その地図そしてフェルメールが描く図からも刊行年は判明しないもの

の、両者を比較するとフェルメールの描写がいかに正確であるかが判明する。

2.1.1 『画家のアトリエ』の壁地図 フェルメールが描く最大の地図が『画家のアトリエ』の中にある。その描写を見ると、地図上部のタイトル帯の文字が読め、ラテン語で次のように書かれる（一部画中のシャンデリアで覆われている）。

NOVA XVII PROV[IN]CIARUM [GERMANIAE INF]ERI[O]RIS
DESCRIPTIO / ET ACCURATA EARUNDEM …DE NO[VO]EM[EN]D
[ATA] … REC[TISS]IME EDIT[AP]ER NICOLAUM PISCATOREM.

「低地ゲルマニア（ネーデルラント）17州新訂精図 ニコラウス・ピスカトル新
監修」

彼が描くのは方位西を上にしたネーデルラント17州の壁掛け地図で、地図の左右に20の都市図と下部にはテキストが付いている。作者はニコラウス・ピスカトルだが、このラテン語名で地図を作成したのはアムステルダム有力地図メーカーであるフィッセル家の初代と、二代目の二人である。家名のピスカトル、フィッセル共に「漁夫」を意味している。ここに描かれた地図は、1652年に家業を継いだ二代目フィッセルが改訂出版したものと考えられている。

画家の想像だけでここまでは詳細に描けないだろうから、地図学史的には、この地図が確かに存在した証拠ともなりうる。実際、フィッセル家が都市図を付随する大型の17州地図を作成したかどうか議論されていた時も、この絵が証拠として語られていたし、1962年にはパリの国立図書館で地図本体が後追いの形で発見されている。その地図は周辺装飾物（都市図やタイトル、テキスト）を欠くものの、初代フィッセルが刊行した現存唯一の図である。

2.1.2 オランダの「黄金時代」と地図学 このような大型の壁掛け地図を生み出したオランダ地図学の背景に触れておく。ヨーロッパ西北部のライン・マース・スヘルデ三河川が北海にそそぐ河口付近の低地地帯をネーデルラントと呼び、現在ではオランダ、ベルギー、ルクセンブルクの三カ国が存在している。そのネーデルラントであるが、フェルメール以前の16世紀においては南部地域（現ベルギー）が経済的にも文化的にも先進地域であった。その中心都市はアントウェルペン（アントワープ）で、日本人にとっては「フランダースの犬」でよく知られている。地図学の分野では、その町で当時最新最良の世界地図帳である『世界の舞台』（A. オルテリウス編、1570年初版）が刊行され、近代地図学の開始を告げていた。

当時のネーデルラントはスペインの統治下に置かれていたが、1579年には北部7州がユトレヒト同盟を結成、独立への闘争を開始し、1608年には休戦条約の締結によっ

6 オランダ製壁掛け世界地図と地図屏風

て事実上の独立を獲得した。そしてウエストファリア条約（1648年）によって、ネーデルラント連邦共和国（現オランダ）の成立となった。この戦争中、1585年にアントウェルペンが陥落するが、その人と情報、技術が北方のアムステルダムに移り、17世紀にはその都市が繁栄してゆく。

アムステルダムの人口は16世紀はじめに1万人程度だったが、1585年以後は急増し、1600年には5万人、20年代には10万人、50年代には20万人という大都市となっていた。それを支えたのが海上交易と商業活動で、1602年に設立するオランダ東インド会社 VOC はその中心である。これらのことは地図学の発展とその売買にも大いなる影響を与え、ホンディウス家やブラウ家、フィッセル家をはじめ多くの地図作製者や出版者を輩出し、アムステルダムは世界中の最新最良地図を生み出すセンターとなった¹⁰⁾。

フェルメールとオランダ地図学を重ねて見てみよう。彼は1632年に生まれ75年に没している。生涯の生活の本拠はデルフトで、アムステルダムの南西約70 km に位置する。地図学で関連を探れば、1638年に17世紀最大の地図メーカーブラウ家の初代 W. ブラウが死去し、息子の J. ブラウがその後を継ぐ。W. ブラウはその晩年にオランダ東インド会社 VOC の公認地図作製者の地位を獲得し、1706年までブラウ家が有した。つまり、VOC が獲得する最新の地理情報を一手に入手でき、それを一番に出版することができたのである。

ブラウ家は、二代目 J. ブラウの時に絶頂期をむかえる。1662年に刊行された世界地図帳『大アトラス』は11巻から成り、600図にのぼる地図と3,000頁におよぶテキストを付している。現代の技術と資本力をもってしても実現不可能と思えるような大著作で、オランダ地図学史上の最高峰として聳え立っている。

ただ、1672年にその工房に火災が発生し原版的ほとんどが焼失し、以後、ブラウ家は衰退へと向かってゆく。それにあわせるようにオランダの地図作製活動も衰退し始め、やがてその地位をフランスに奪われるのである。そうすると偶然ではあるが、フェルメールはブラウ家の絶頂期、つまりオランダ地図学の絶頂期を生きたことになる。世界一の地図大国という雰囲気、フェルメールの生きた時代には充満していたはずである。

2.1.3 壁掛け地図（Wall Map）と江戸時代の日本 フェルメールの絵画作品に出てくるような地図は特殊な存在で、オランダ地図学の黄金期に咲いた大輪の花ともいえる。そもそもヨーロッパにおける地図は、本形式の地図帳（アトラス）が普通で、室内装飾ともなる壁掛け地図は例外的なものである。

オランダにとって、17世紀は黄金時代と呼ばれる。それを象徴するものは東インド会社 VOC による海外交易、レンブラントやフェルメールの絵画芸術、そして地図製作を挙げなくてはならない。生み出される地図は、その情報の新しさと正確さはもちろん、装飾性豊かな芸術品であることも求められ、地図メーカーはライバルとの厳しい競争に鎬を削る。その答となる成果物が、大型の壁掛け地図（Wall Map）であった。世界地図には最新の地理情報に加え、その周囲に世界各地の人物や都市の図、そこに君臨する王侯の図を配して、一目で百科全書的な情報が得られるようになっている。さらに図中には、「四季（春夏秋冬）」や「四大元素（火・大気・水・土）」の擬人化像を配し、太陽系の惑星なども描き入れ、世界地図でありながら宇宙の全体像を描く壮大なマンダラ構造を有している。そのような地図は17世紀のオランダのみが作りえた傑作である。

壁掛け地図は何枚もの銅版原版から印刷された部分図を貼り合わせ、その周囲にテキスト文や他の装飾物（都市図など）を加え、リンネル（亜麻布）やジュート（黄麻）で裏打ちされて完成する。壁に掛けるために、地図の上下に木軸が付けられるのはフェルメール作品に見られるとおりである。そして彼が描くように、当時の室内には壁地図がよく飾られたのだろう。しかし、地図は壁に吊るすため傷みやすく、なおかつ新情報を入れつつ作り直されるので、長く保存されることはめったになかった。よって現在にまで残る壁掛け地図はごく少ない。

江戸時代の日本は、この壁掛け地図と大いに関連があり、きわめて強い影響を受けている。壁掛け地図は伝存しにくく、特に大型図は世界的稀観品というほど僅かしか現存していない。しかし、江戸時代に日本に伝わったものが東京国立博物館に2点も保管されている。横寸法が3mにとどくような大型地図で、保存状態も良好である¹¹⁾。おそらくオランダから徳川幕府に献上されたもので、書き込みや貼り紙などもあり、蘭学者などが利用したようだ。新井白石『西洋紀聞』に、宣教師シドッチが出されたオランダ製世界地図を前にして「今は、彼国にも得やすからぬ物也」と語ったとあるが¹²⁾、それに相当するものかもしれない。

また後述するように、地図自体（P. カエリウス 1609年版世界地図）は今に伝わらないが、それを手本にして作成された作品がある。『万国絵図屏風』（宮内庁三の丸尚蔵館）をはじめとする地図屏風や、『泰西王侯騎馬図』（サントリー美術館、神戸市立博物館）などのいわゆる初期洋風画の逸品は、その源をたどればオランダ製壁掛け世界地図に行き着くのである。江戸時代の日本人は、壁掛け地図から地理情報ばかりか絵画芸術も取り出していた。

2.2 オランダ製原図と地図屏風

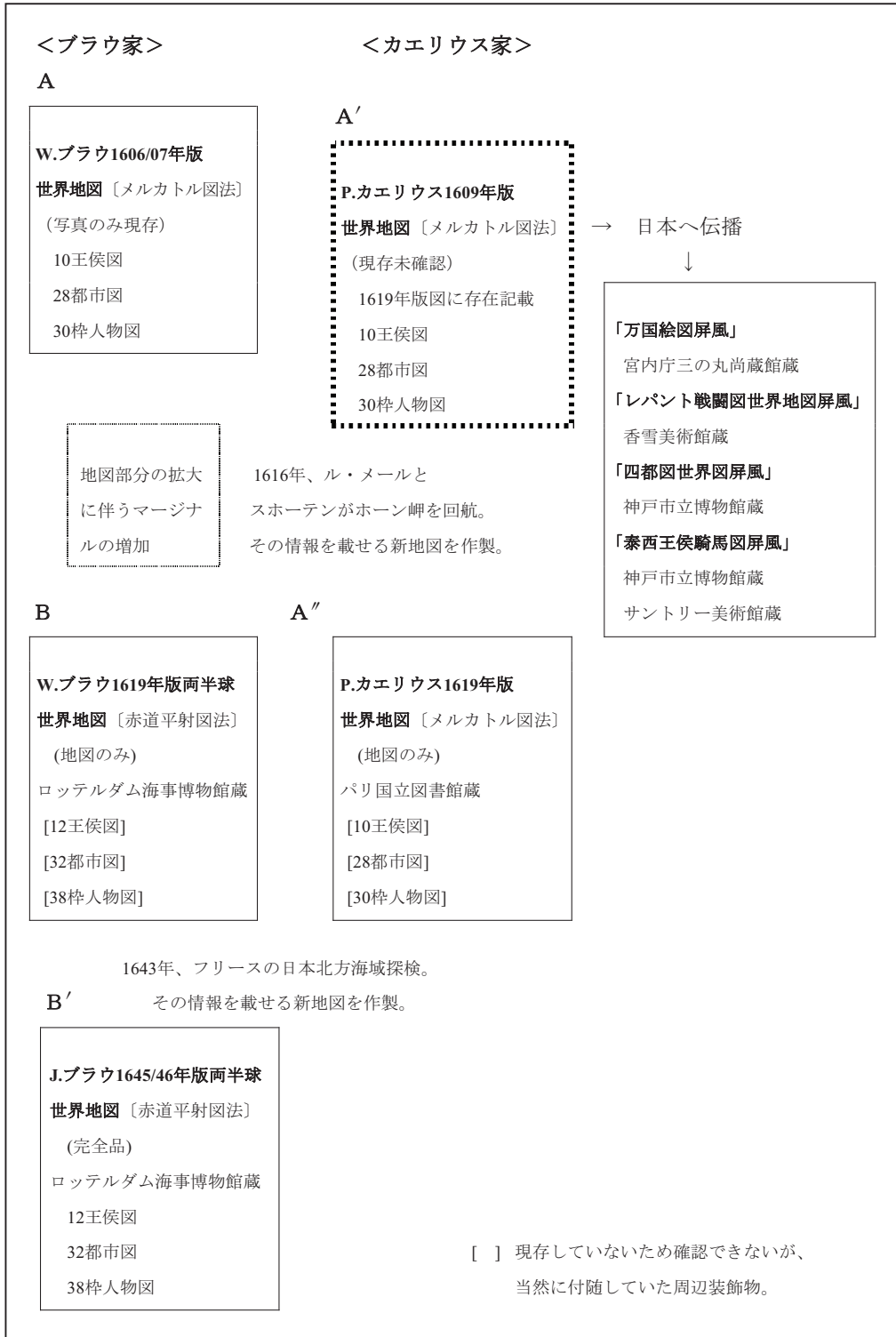
2.2.1 P. カエリウス 1609 年版世界地図とは その根本資料ともいべき P. カエリウス 1609 年版世界地図（経緯表 A'）だが、その図自体は現在にいたるも確認されていない。よってその姿を復元することから始めなければならないが、P. カエリウス 1609 年版世界地図はその前後の世界地図を基にし、さらに模写された宮内庁本の三図を参考にすることによって蘇らせることができる。

その前の図とは、第二次世界大戦時に焼失したといわれ、今は写真版でのみ伝わる W. ブラウ 1606/07 年版世界地図（A）である。その世界地図の改訂（海賊）版が、P. カエリウス 1609 年版世界地図で、これが宮内庁本ほか二例の日本人作地図屏風の原図となったものである。

その図に、ホーン岬を回航しドレーク海峡の存在を確認したル・メールらの新情報を載せるため、1609 年図の改訂版である P. カエリウス 1619 年版世界地図（A''）が、カエリウス家において作製される。その P. カエリウス 1619 年版世界地図は、地図部分のみ存在し周辺部分を欠く図が現在パリ国立図書館に所蔵されている。その図中に、1609 年版図の存在とその周囲には王侯図等が取り巻いていたことが記述されている¹³⁾。これによって、本来は王侯図など周辺装飾物を有していたこと、つまり W. ブラウ 1606/07 年版世界地図とほぼ同じ姿をしていたことがわかるのである。そこにあるカルトーシュ（飾り枠）の上には二股コンパスが描かれ、これが宮内庁本と一致する。W. ブラウ 1606/07 年版世界地図には、このコンパスは描かれていない。

ブラウ家の方でも当然、ドレーク海峡の存在を知らしめる最新世界地図を出した。出版するにあたって、1606/07 年版世界地図のような外枠矩形のメルカトル図法ではなく、赤道平射図法の両半球図を用いた W. ブラウ 1619 年版両半球世界地図（B）を新たに作製した。この図の周囲装飾物には 1606/07 年版世界地図の王侯図等が転用されたが、地図の図幅面積が 1606/07 年版図よりも大きくなった分、周囲の王侯図等の数も増やさなければならなくなった。つまり、10 王侯図を 12 王侯図、28 都市図を 32 都市図、民族衣装図の枠が 30 から 38 へと増加した。現在、周囲の装飾部分をも持つ 1619 年版図は存在せず、世界地図部分のみがロッテルダム海事博物館に所蔵されている。

そして、1642 年にタスマニア島南部やオーストラリア大陸が確認され、1643 年のフリースによる日本北方探検によって、北海道とクナシリ・エトロフの両島とウルップ島の一部が初めて判明したが、それら重要な新情報をいち早く地図に載せるため、ブラウ家では 1619 年版両半球世界地図の当該部分を修正した J. ブラウ 1645/46 年版世



『万国絵図屏風』に関連するヨーロッパ製壁地図経緯表

6 オランダ製壁掛け世界地図と地図屏風

界地図（B'）を急いで出した。この図は周辺装飾も含め完全な姿で、現在、ロッテルダム海事博物館に所蔵されている。つまり、W. ブラウ 1606/07 年版世界地図で使われていた王侯図や都市図、人物図などは、息子である J. ブラウの 1645/46 年版世界地図において、我々は実際に見ることができるのである。

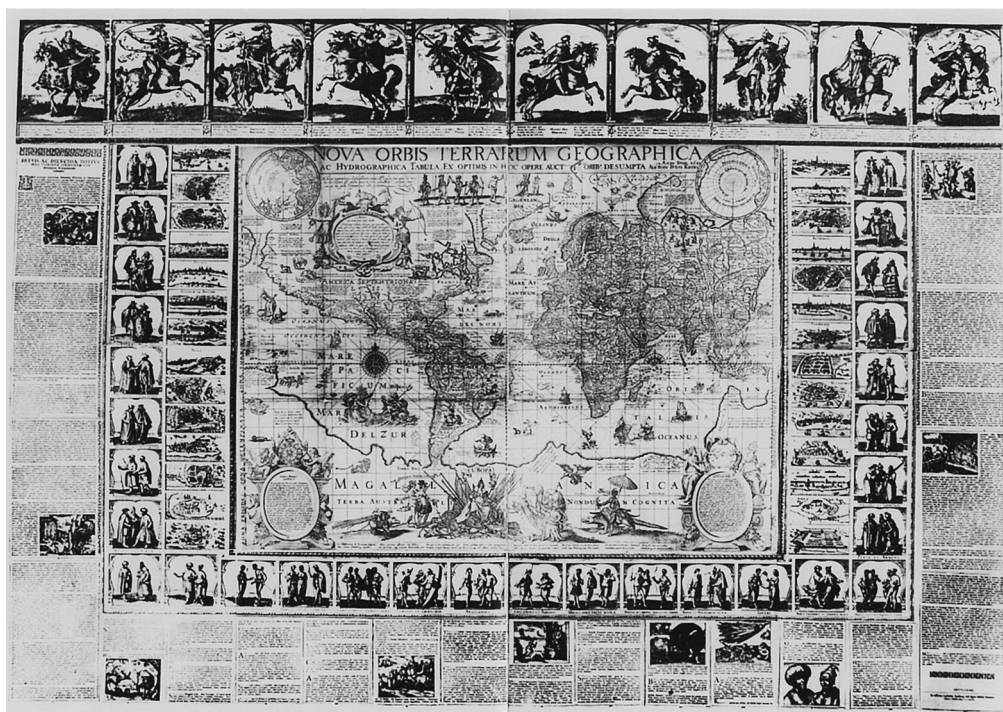
このような前後の地図を確認した後、P. カエリウス 1609 年版世界地図の復元への道筋は以下のようなだろうか。

まず、P. カエリウス 1619 年版世界地図を基にするが、そこに描かれている南米大陸南端の表現は 1609 年段階までもどさねばならない。すなわち、1619 年版カエリウス世界地図では南米大陸南端～マゼラン海峡～フェゴ島と続き、その南側に海峡（現ドレーク海峡）が描かれ、南方大陸とフェゴ島の間が航行できることが表現されている。しかし、オランダの航海者ヤーコブ・ル・メールとウィレム・コルネリスゾーン・スホーテンが指揮する艦隊がホーン岬を回航したのは 1616 年であり、1609 年版世界地図段階では宮内庁本に表現されているが如く、フェゴ島は南方大陸とつながり、マゼラン海峡のみが航行可能な海峡でなくてはならない。よって、この部分を W. ブラウ 1606/07 年版世界地図から持ち寄り、入れ替える。

次に、この世界地図の周囲に、王侯図・都市図等の周辺装飾物を付け加えなければならぬ。この周辺装飾物は、P. カエリウス 1619 年版世界地図中にあるカルトーシユの文言（「装飾や楽しみのために余は（世界地図）のマーヅナルを我々の時代に世界を支配する最も強力な一〇の統治者の絵や、多くの好奇心ある観察者を楽しませるであろう多種多様な相異なる民族のコスチュームで埋め尽した」¹⁴⁾）と、『万国絵図屏風』に移され描かれた都市図、王侯図、人物図から見ても、W. ブラウ 1606/07 年版世界地図の周辺装飾物をあてはめてよからう。つまり、『万国絵図屏風』は P. カエリウス 1609 年版図の存在を証明するものなのである。

その結果、P. カエリウス 1609 年版世界地図（復元図）は次のように出来上がるのである。

2.2.2 P. 1609 年世界地図から生み出された地図屏風 P. カエリウス 1609 年版世界地図（復元図、P.148）と、それを原拠とする三屏風（宮内庁本、香雪本、神戸本）を比較してみよう。世界地図としてみた場合、結論を先にすれば、原図である P. カエリウス 1609 年版世界地図の姿を最もよくとどめているという点からは、宮内庁本→香雪本→神戸本という順がつけられる。描かれた図の範囲は、宮内庁本が最も広く模写されている（北緯 74 度～南緯 60 度）。特に、南米大陸とマゼラン海峡をもって対峙する陸地（現フェゴ島）がさらに南方大陸へと繋がっている様子を明示しているの



復元 P. カエリウス 1609 年版世界地図

は宮内庁本のみである。そして、このことはスホーテンがホーン岬を回航し、その部分には南方大陸が存在しないという探検成果を盛り込んでいる 1619 年版図がこれら屏風の原図ではなく、その前図つまり 1609 年版図こそ原図たる証拠である。

また、図中の陸地には国別と思われる色分けがあるが、これらは三屏風ともほぼ同様で大きく異なる点はない。ヨーロッパで刊行される地図やアトラスの制作段階においては、専門の彩色師が存在しており、着色・無着色の二通り出ていたので、おそらく原本に色区分がなされていたと思われる。つまり、わが国にもたらされた大型壁掛け地図には彩色が施されていたことが想定される。

また三屏風ともに赤道には経度目盛があり、その 10 度毎に楔状のマークを刻んでいることが注目される。これは原本では 10 度毎の経度数を記入している箇所、縦に経線が引かれている場所でもある。その箇所とマークとの整合性は宮内庁本が最もよく、神戸本が劣る。なお、宮内庁本に描かれる大西洋北回帰線上のコンパスローズは、原本の基準子午線（経度零度線）を引き継いでいる。原本である P. カエリウス 1609 年版図はメルカトル図法で描かれているため、地図上の経緯線は直交し経線間隔は同一で、緯線間隔は赤道から極に近づくほど広がっている。地図上では矩形の方眼が

6 オランダ製壁掛け世界地図と地図屏風

できているわけで、楔状マークの一致などからすると、宮内庁本を描写する際にその方眼を基に基準枠を組み、模写したのではないかと思わせる。

その点では、神戸本は原本の世界地図が目の前にあったかどうか疑わしい。これはたとえば対になっている四都市図をみても、右端のイスタンブールのトップカプ宮殿がピラミッドのように描かれていて、原図からはかなり離れた姿となっている。神戸本はかつて、その原図は卵形図法の世界地図ではないか、または外枠矩形のメルカトル図法の世界地図を卵形に変形したのではないかとの見解があった。しかし資料を詳細に観察すれば、赤道線上に360度分の目盛は刻んでおり、張り出た卵形部分は巨大日本を描くために創出された場であることがわかった。つまり360度以上を描く世界図であり、地図という概念からは遠く離れるものである。

朝鮮半島を含む日本周辺地域の描写は三屏風とも原本とは全く異なり、ヨーロッパ製地図よりも優れた東アジア地域像を描いている。16～17世紀における世界地図上の日本列島の形状という問題は、地図の東西文化交流という点から地図学史上で最も関心が高い。研究史としては19世紀前半のシーボルト『日本』にまで遡る時間の長さを持っており、東西の研究者入り乱れての議論が活発である。

日本周辺地域に関し、ヨーロッパ製地図よりもより進んだ描写をしている地図屏風の問題は、前述したようにかつて激しく論争されたが、つまるところそれが日本人オリジナルの図に因っているのか（中村拓の戦国日本図）、イグナシオ＝モレイラ作図に因っているのか（岡本良知のイエズス会新図）ということになる。しかし、現在のところ決め手となる証拠はなく、世界地図の中で日本列島を位置づけるなど、状況証拠からすると日本人オリジナルというよりは、モレイラを含めたイエズス会の関与・影響が大きいとした方が、よりつじつまが合いやすいことは前述した。

宮内庁本は日本列島や朝鮮半島はもちろん山東半島の描写も明瞭で、これらはポルトガル製世界地図を手本にして作成されたと思われる16世紀末の初期世界地図屏風（大阪個人蔵、福井浄得寺蔵など）と極めて近い。ここでも神戸本は他の二者と比較して日本列島太平洋側の諸半島がかなり大きくデフォルメされている。

これら屏風の描き手は、日本国内はもちろん周辺地域も含めた地理的知識情報に長けていたことがわかるが、日本列島を世界地図上のどの範囲で収め描いているのかを注目してみよう。九州の南端はほぼ正しく北緯30度付近に位置づけられるが、このことは日本を確認した直後の16世紀後半の地図からみられ、P.カエリウス1609年版図も三屏風もそれほど差はない。一方、本州北端の緯度は当時のヨーロッパにおいて確信した数値は得られておらず、P.カエリウス1609年版図は北緯38度になっている。

その原本に照合すると、宮内庁本が北緯44度、香雪本が47度、神戸本が57度程度の所に日本列島北端が位置づけられ、神戸本の巨大日本が一際目立っている。ちなみに東西経度の範囲でも神戸本が大きく、宮内庁本がもっとも小さい。

イエズス会宣教師ジョアン・ロドリゲス（1561～1633年）の『日本教会史』には日本の地理的情報が詳細に記されるが、日本の緯度の範囲は薩摩国坊の岬から奥州津軽までとして北緯30度1/3～42度1/2、経度の範囲は五島列島から本州東海岸まで東西15度と記されている¹⁵⁾。この点でも、宮内庁本は優れており、イエズス会の有する地理知識に近い。三屏風を指して「これらの図が、イエズス会の残した最大最美の地図的労作であったことは、いうまでもないだろう」という室賀信夫の言葉¹⁶⁾が思い起こされるが、イエズス会画派による美術作品としての価値はともかく、地図的作品という点からは神戸本にはあてはまらない。

このように原本の姿をかなりとどめている宮内庁本だが、さらに他の二例に見られない特徴的な事として、以下に示すように、日本国内10箇所に印された金色の都市マークがあげられる。

畿内2：東海道2：東山道1：北陸道1：山陽道1：南海道1：西海道2

東山道・北陸道・南海道に示されたマークそれぞれをにわかには特定しがたいが、畿内と東海道の4つは可能である。つまり、特に大きく印される江戸と京、大坂、そして伊豆半島との位置関係からして駿府、これらは特定できる。駿府であるならば、そこが特別に選択される理由としては徳川家康（1542～1616年）と結びつけるのが一番妥当である。作成年代とはいえないまでも、この屏風の景観年代としては家康晩年の大御所時代の状況を表している。原本が1609年刊であるので、作成年代は1610年代前半が上限だろうし、さらには下記のように、家康が見たという世界図屏風を結びつけて考えることも可能であろう。

『駿府記』慶長十六年（1611）九月二十日に、徳川家康が“南蠻世界圖ノ屏風ヲ覽ル”という記事がある。（『大日本史料 第十二編之八』882頁）

仮に家康が没する（1616年）直前の時代だとすれば、宮内庁屏風の日本列島に印された城下町10カ所は次のように想定することができるのではなかろうか。

畿内2：大坂（豊臣家）、京（もしくは伏見）

東海道2：江戸、駿府、東山道1：会津（蒲生家）

北陸道1：金沢（前田家）、山陽道1：姫路・岡山・広島・萩のいずれか

南海道1：土佐（山内家）、西海道2：福岡（黒田家）、熊本（加藤家）

都市を記号化して図上に表現することはヨーロッパ製地図には普通に見られる。そ

6 オランダ製壁掛け世界地図と地図屏風

れらを真似たものが屏風上の日本各地に印された都市マークであるが、駿府と思われるマークがある以上、この日本国内に印されたマークの都市はある意図で選択されたと解すべきであり、またその意味から、イタリアのローマがひときわ大きく別種のマークで印されていることで、キリシタンとの関連を考えることが出来る。

P. カエリウス 1609 年版世界地図から生み出された三つの地図屏風を見ると、絵画作品としてはともかく地図として見るならば、その出来ばえの順序は宮内庁本、香雪本、神戸本ということになり、さらにいえば、神戸本は地図としては論外のものと言わざるを得ない。ただ神戸本の興味深い点は、一つには地図としての概念を逸脱してまでもなぜ巨大な日本を描いたのかということ、二つには日本ならびにその対蹠地を中心とする図を描くこと、さらにはオランダ製原本には存在しない東シナ海を行き来する和船の姿をわざわざ描くこと—これは御朱印船貿易（1635 年で終了）の様子を示すものとも考えられる—、等々は神戸本の発する重要なメッセージといえよう。

さらにこのような序列がつけられるということは、三屏風における作成年代の差異を示すことでもある。その制作年代の幅を考える際には、描き手である画家の生存年の幅で考えることが可能だと思われる。つまり、それらの屏風を描いたのは西洋絵画の技法を直接学んだ、いわゆる「イエズス会画派」の日本人絵師であり、前後の時代には存在しない特殊な描き手たちなのである。

イエズス会の絵画教育については、1583 年にイタリア人修道士ジョバンニ・ニコラオが聖堂の祭壇画や壁画を描くために日本に派遣され、長崎のセミナリヨの画学舎で洋画の手法を日本人生徒たちに教えることから始まる。そのニコラオは慶長 19 年（1614）にマカオに追放されるため、イエズス会画派の活動の最盛期は 1590 年代から 1610 年代初め頃と考えられる。つまり、その時期はニコラオ自身が日本に滞在しており、また彼に教えられた弟子たちも絵師として熟達した時期であったと思われる。記録に残る範囲では、最年長者がペドロ・ジョアン（1566 年生まれ）で、最年少者はヤコブ・丹羽（1579 年生まれ）である。1610 年代前半には 30 代もしくは 40 代の絵師たちが、数多くニコラオの周りに存在していたと思われる。

その時期つまり 1610 年代の前半に 1609 年版世界地図がもたらされ、屏風に描かれたものが仮に宮内庁本であるとすれば、その美術作品としての出来映えもさることながら、徳川家康を意識したと思われる駿府の明示やアジア地域におよぶ地理知識など、その屏風に含まれる諸問題に対して、蓋然性の高い説明がつきやすいのではないか。宮内庁本はニコラオと日本人絵師たち、そしてそれらを包括するイエズス会の成し遂げた洋風画の傑作、最新の世界地図としてとらえることができる。

イエズス会画派の活動の終焉は、ニコラオがマカオに追放される1614年とするのが妥当だが、ただ正保2年（1645）に刊行される世界図『万国総図』と対になった外国人物図には洋風画の雰囲気色が濃く残り、その後刷り改訂図は外国人を描くにしても和風化が進んでいる。このことはイエズス会画派の絵師たちが17世紀中頃までは存命して、絵を描き提供し続けていた可能性を示している。

宮内庁本は、日本列島の中に駿府があるところから、1610年代の状況が読み取れることを先述したが、1614年のキリスト教信者大追放以後もポルトガル関係ということまで併せて考えると、現存する世俗的テーマの洋風画はポルトガル人追放の時期（1639年）まで洋風画が描かれていた可能性はある。たとえば日本人洋画家として、島原の乱（1638年）の山田右衛門作などが知られるが、16世紀末頃にイエズス会の学舎で絵画教育を受けた画学生達も、おそらくその頃までなら存命していただろう。つまり鎖国体制完成の時期までだが、さらに前述した正保2年（1645）刊行の『万国総図』に洋風画の雰囲気が漂う人物図が付いていることから、その頃まで存命していたことも考えられる。

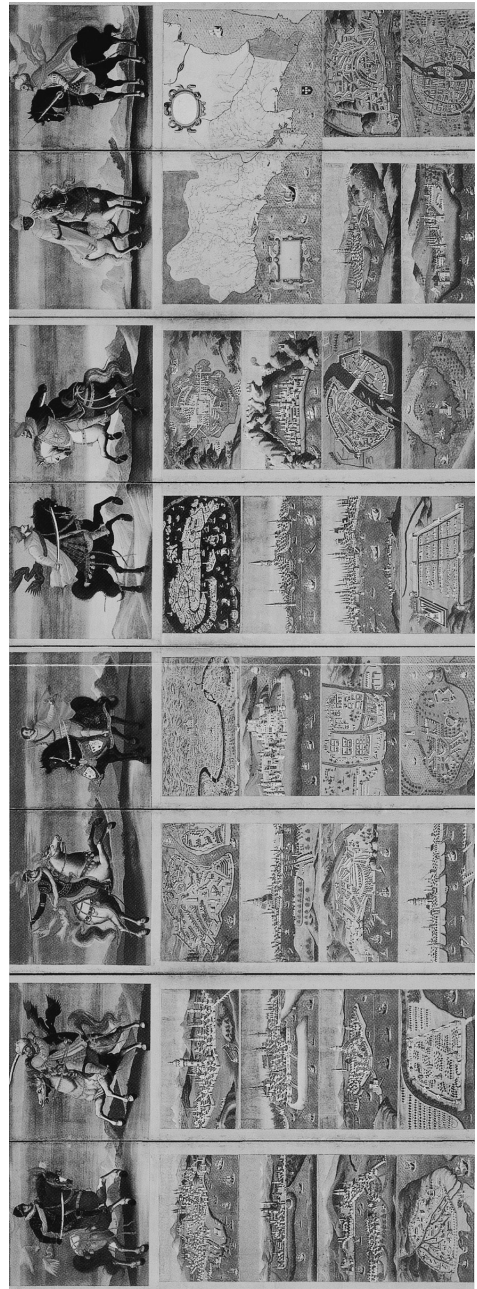
もちろんこの三屏風が17世紀中頃の時代に作成されたというのではなく、少なくとも宮内庁本と神戸本が同時期に描かれたとは認めがたい。ただ先述したように、家康が慶長16年（1611）9月に見た地図屏風が宮内庁本であるならば、他の二屏風が1614年のキリスト教信者大追放までに描かれたとも考えられる。制作地は描き手が存在する可能性、地理的情報や人物図画情報の在り処、また色濃く洋風画的雰囲気の残る正保版『万国総図』の開版地から（図中に“長崎津開板”とある）、さらには西川如見『長崎夜話草』（1720年刊）には“世界の図などは長崎画師を根本とす”との文章もあることから、やはり長崎の地がふさわしい。

2.2.3 宮内庁本『万国絵図屏風』に見る図中情報の受容 P.カエリウス1609年版図の地図周囲には、W.ブラウ1606/07年版図と同じ10王侯図、28都市図、30区画の人物図が取り巻いていた。それは宮内庁本の世界図ならびに王侯都市図から明らかである。王侯都市図を見ると、各扇に計8人の王侯が原図の7倍程度の拡大率で描かれている。これらはすべてW.ブラウ1606/07年版図（つまりはP.カエリウス1609年版図）に一致する。王侯は二人が対峙するように配され、外されたのは中国王とイングランド王ということになる。興味深いことは中国王が外されていることで、中国ならば日本人の世界観の中に存在しており、原図にあるその姿は虚像であると判断できたのではないか。

類似の作品として初期洋風画の傑作『泰西王侯騎馬図屏風』（サントリー美術館、神



『万国絵図屏風』(世界図と人物図) 宮内庁三の丸尚蔵館蔵



『万国絵図屏風』(王侯図と都市図) 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

戸市立博物館)には、動態・静態四人ずつの8王侯が原図の40倍の拡大率で描かれるが、7人が宮内庁本と一致する。つまり原本から宮内庁本、そして『泰西王侯騎馬図屏風』が生み出されたと考えられる。10王侯の中、イスパニア王は神戸本の都市図セビリヤの上部、ならびに香雪本レパント戦闘図の橋上と、三屏風に共通して描かれる。

次に都市だが、宮内庁本では王侯の下に28の都市図が描かれている。それらは個別に描かれ張り合わされており、複数の絵師が働く工房のような存在が想定される。28都市図に関しては、この内の27都市がヨーロッパ製原本と一致し、唯一の例外がローマである。10人中8人が一致する王侯図、28都市中27都市が一致する都市図、この数字は原本に対しかなり忠実な態度であり、宮内庁本が極めて近い位置にあったことの証明である。

それだけに模写された屏風と原本との違いは注目しておかねばならない。一つは原本には埠外のポルトガル国の地図を、オルテリウス『世界の舞台』から持ち寄り挿入していること。これだけでこの屏風の画者がポルトガルに与する人物であるとわかる。そして二つはローマを挿入することによって外された都市、つまり原本にはある香料諸島テルナテ島のガマラマである。テルナテ島は16世紀にポルトガルの香料交易を支えたが、17世紀にはオランダがそこを占拠し、平戸オランダ商館長日記などをみても交易地としてテルナテ島の名が出てくる。ポルトガル人にとって苦い思い出の地を外し、キリスト教ゆかりのローマに入れ換えた、またはローマを入れるためにそのガマラマを外したと考えるのは想像が過ぎるが、それほど選択の仕方である。やはり屏風の画者はアムステルダムで作成された世界地図を使いながら、キリシタンの、そしてポルトガル系の人物、あるいはそれらに与する人物なのだろう。

神戸本の世界図と対になる屏風には、リスボン・セビリア・ローマ・イスタンブールの四都市が採用されているが、宮内庁本の向かって左の上段に順序を違えてなっている（リスボン・セビリア・イスタンブール・ローマ）。これなどは神戸本が宮内庁本から派生したことを示しており、やはりキリシタンそしてポルトガルに通じる雰囲気である。またキリシタンのといえば、香雪本の世界地図と対になっているのがローマ皇帝軍と異教徒であるトルコ軍との戦いである。なお、ここに記したことはイェズ会画派による世俗的テーマとして、美術史研究者の間では常識の部類に入ることはいうまでもない。

宮内庁本の王侯図都市図からすると、P. カエリウス1609年版図はW. ブラウ1606/07年版図のほぼコピー図であることがわかる。17世紀初頭のアムステルダムにおける両者の関係は協力友好的なものというよりライバル関係であろうし、ブラウ家では息子の代まで使用しているので、原版の移譲とか買い取りも考えられない。現代の出版感覚からすると、無謀な海賊版出版ということになる。

次に宮内庁本の世界図の左右に描かれる人物図に注目してみよう。オランダ製原本には30区画の人物図があるが、これは必ずしも一区画一国民（もしくは一民族）では

6 オランダ製壁掛け世界地図と地図屏風

なく、複数国民が描かれる区画は11を数え、よって41種の人物図を描いていることになる。この人物図の転載のされ方であるが、宮内庁本は世界地図の左右に計42の人物区画を持つが、その内の25区画をオランダ製原本から採用しており、三屏風中で最も多くの人物を原本から採用している。一方、17区画は別の資料に因っており、P.カエリウス1609年版図がこの屏風にとって絶対必要条件ではあるが十分条件ではないことを表している。その点では香雪本、神戸本とも同じことがいえる。香雪本の世界図下辺に16の人物図の区画が見られるが、カニバリズム（食人）図を除いて、15区画はオランダ製原本に一致する。例外の食人図は宮内庁本にもみられ、木にぶら下げた四肢、焼台、女に手を引かれた子供、男に手を差し出す子供など同一で、原本が同じであることを示している。

また神戸本四都図のローマの上にイタリア人、セビリアの上にイスパニア人、コンスタンチノーブルの上にトルコ人が描かれ、その整合性を意図していることは明らかで、描き手の地理知識の確かさをうかがわせる。このように都市図との関連もあるためだが、三屏風とも共通して出てくるのはトルコ・スペイン・イタリアの三カ国である。ただ不思議なことはベルギー・オランダ人の図像が採用されていないことである。これは単なる偶然であろうか。因みに原図は異なるが地図屏風の周囲に40の人物図を持つ南蛮文化館（大阪市）所蔵図をみると、一区画が空白の所があり、そこには他の資料との考察からオランダが入るはずなのである。描く区画があるにもかかわらず、オランダがオミットされているのである。これも深読みの部類に入るのだろうが、キリシタン・ポルトガルという視点から考えると興味深い。これら三屏風の人物図は、江戸時代に流行する外国人物図画の図書においてさらなる展開を見せる。

2.2.4 『万国絵図屏風』のまとめとして 改めて復元したP.カエリウス1609年版世界地図と宮内庁本「万国絵図屏風」とを比較してみる。世界地図を比べると、屏風画面の横長の比率におさめるため、1609年版図すべてを描くのではなく、北緯74度から南緯60度の範囲を描いている。ちなみに類例の香雪美術館ならびに神戸市立博物館が所蔵する世界図屏風よりも広い緯度範囲を描いており、このことによって『万国絵図屏風』だけが、フェゴ島と南方大陸が連続している状況が読みとれる結果となっている。

W.ブラウ1606/07年版世界地図とは不一致であるものの、復元したP.カエリウス1609年版世界地図と『万国絵図屏風』が互いに一致する点として、次のことがあげられる。

①南半球にある二つのカルトーシュの表現。特にカルトーシュの上部に描かれた開い

たコンパス。

- ②アフリカ大陸の南方海上で戦闘する帆船が描かれているが、その位置と姿。
- ③南米大陸南端のフェゴ島が、南方大陸とつながり、マゼラン海峡のみが航行可能な海峡であること。
- ④北太平洋海上に存する、海水を吹きだしている海神。

王侯図、人物図、都市図に関しては、W. ブラウ 1606/07 年版世界地図と同様のものが、P. カエリウス 1609 年版世界地図に採用されていたはずで、そのことは『万国絵図屏風』の存在がその証拠といえよう。

一方、不一致点としては次のとおりである。

- ①日本およびその周辺地域の描写。
- ②ニューギニア西海岸部分の描写。
- ③日食ならびに月食を説明する図の存在。
- ④ローマ図、ポルトガル国図の存在。
- ⑤カニバリズム（食人）図の存在
- ⑥コンパス付きのカルトーシュに描かれる天使の羽が抹消¹⁷⁾。

地図を通して文化交流や東西交渉の跡を考察するという視点からは、一致点よりも不一致点の方がより重要であることはいうまでもない。特に、ここに挙げたような単なるケアレミスではない意図的な改変は、描画者から送られた無視できないメッセージととらえるべきである。

結論として、宮内庁本は初期洋風画の代表作品であるばかりか、地図資料としても重要なものであることが指摘できる。つまり、日本付近の地図的描写が当時のヨーロッパの水準をはるかに越えており、絵画芸術のすばらしさに加えて当時における最高最良の世界地図になっている。

また、宮内庁本からは「ポルトガル」「キリシタン」「徳川家康」というキーワードが読みとれるのである。徳川家康というキーワードは、世界図屏風中に描かれた日本列島内部にわざわざ駿府がマークされていることと、さらには家康が世界図の屏風を見たという『駿府記』慶長十六年（1611）九月二十日の記事を加えて考えたものである。

ただ『万国絵図屏風』の制作年については、たとえば高橋正などは「イリアン（ニュー・ギネア、筆者註）の図形から見て、二〇年代から、場合によっては三〇年代も考えることもできると推測している。」¹⁸⁾としている。さらに、正保2年（1645）刊『万国総図』には外国人物図が付随しているが、それを見るとその時代においてさえ

も、洋風表現の達者な描き手が存在していたことがうかがえる。そのようなことから考えると、その制作年を高山右近らのキリシタン追放（1614年）を重視するあまりに、1610年代前半に限定することはできず、17世紀半ばまで想定しなければならないだろう。

しかし、八曲一双屏風という巨大画面と異国趣味の主題を組み合わせることは、いかにも近世初頭の雄大な安土桃山文化といった感じで、このような大画面の洋風画が近世初期のいつ頃まで続くものなのかは日本美術史の研究領域で、将来は相互調査で解決されることが要望される。『万国絵図屏風』の制作年は17世紀前半のいつであろうか。それについては、そこに表現された地図および地理知識からの分析と、美術史からの分析結果の統合こそが、その答えを導き出すものと信じる。

おわりに

以上のように見てくると、P.カエリウス1609年版世界地図が日本製屏風に姿をかえて見事に受容されていることがわかり、特に八曲一双の大画面に原本の諸要素をほぼもれなく引き継いでいる宮内庁本はその精華といえよう。

17世紀のアムステルダムで生み出された地図帳（アトラス）や壁掛け地図は、室内でそれらを目にすることによって、居ながらにして世界中の、いやさらには宇宙全体の知識や構造まで獲得できるようにという、そのような意図をもって作成された。宮内庁本などは原本の姿を屏風一双の巨大画面に再構成しており、そのような意図さえも意識し受け継いでいるのではないかと思われるほどである。かつて室賀信夫はこれら地図屏風をはじめ初期洋風画の優品を指して「それもこれも、みなこのブラウの地図に発していたわけである」と述べた¹⁹⁾。P.カエリウス1609年版世界地図は十分条件ではないが、絶対必要条件であることには違いない。

それに加えて、先述したように日本周辺地域の描写は当時のヨーロッパ地理学の知識よりも進んでいる。ヨーロッパ製地図を手本としながらも、日本人の改良によって、その時代最良の地図を作ったという誉は、これまでは間宮海峡を描き込んだ19世紀始めの高橋景保『新訂万国全図』に与えられていた。がしかし、このP.カエリウス1609年版図を手本とする江戸時代初期の地図屏風こそ、17世紀前半における最新最良そして最美の世界地図といってよいものである。

以上、ヨーロッパ製壁地図のわが国への受容と変容の一例を取り上げたが、他にも江戸時代にもたらされた壁地図は数多い。例えば、18世紀後半の事例（『世界四大洲

図・四十八国人物図屏風』神戸市立博物館蔵)などは、その手本はアムステルダムの地図メーカーであるファルクが作成した世界地図と四大陸別図の5枚がセットとなった壁地図である²⁰⁾。世界地図を描いた屏風は無いものの、四大陸図は二大陸ずつ日本人絵師によって一双の屏風に描かれ、江戸時代の地図史上でも異色の存在である。片方には、アジアとアフリカの大陸とそこに関わる人物の図を12区画ずつ配し、その上部には四季職耕図と韃靼人狩猟図と思われるテーマが描かれており、いわば中国的な雰囲気醸しているといえる。また他方には、アメリカとヨーロッパの大陸とそこに関わる人物の図を配し、その上部にはヨーロッパ海戦図と動植物ならびに四大陸を擬人化して描く「全世界」の2テーマを表現している。いわばヨーロッパ的な雰囲気醸している。さらには模写図などは存在していないが、新井白石がその調書を取っていることから²¹⁾、W.ブラウ1619年版両半球世界地図が日本にもたらされていたことも明らかである。

このようにヨーロッパ製地図の受け入れに際して、大型壁掛け地図の存在は極めて重要な位置を占めている。それは地理学や地図学にとどまらず、美術作品の上においても役割を果たしている。ヨーロッパ製壁掛け地図は、壮大な東西文化交流を跡づける一級資料といえよう。輸入経路なども含めて、その解明は困難なものの、今後とも壁掛け地図の伝播と役割を追求していきたい。

注

- 1) 岡本良知『南蛮美術』（日本の美術19）平凡社 1965年、『南蛮美術と洋風画』（原色 日本の美術20）小学館 1970年、坂本満編『初期洋風画』（日本の美術80）至文堂 1973年、坂本満・吉村元雄『南蛮美術』（日本の美術34）小学館 1974年、『風俗画—南蛮風俗』（日本屏風絵集成15）講談社 1979年、ほか
- 2) 秋岡武次郎「桃山時代、江戸時代初期の世界図屏風等の概報」『法政大学文学部紀要』No.4 1958年、中村拓「南蛮屏風世界図の研究」『キリシタン研究』第九輯 吉川弘文館 1964年、嶋田忠正「南蛮世界図屏風原図考（その一）」『長崎談叢』56輯 1974年
- 3) 海野一隆・織田武雄・室賀信夫『日本古地図大成 世界図編』講談社 1975年、高橋正「南蛮屏風に描かれた都市図の源流について」『古地図研究』1978年、室賀信夫「新しい世界の認識」『探訪大航海時代の日本』5巻 小学館 1978年、Günter Schilder (1979) : Willem Jansz. Blaeu's wall map of the world on Mercator's projection, 1606-07 and its influence IMAGO MVNDI 31、高橋正「都市図屏風の源流について」『月刊古地図研究』15-2 1984年、高橋正「南蛮都市図屏風からカエリウス世界図へ」『絵図のコスモロジー 上』地人書房 1988年、Günter Schilder (1990) : MONUMETA CARTOGRAPHICA NEERLANDICA III、三好唯義「P.カエリウス1609年版世界地図をめぐる」『神戸市立博物館研究紀要』13号 1997年、三好唯義「万国絵図屏風」の原図について」『神戸市立博物館研究紀要』19号

6 オランダ製壁掛け世界地図と地図屏風

2003年

- 4) 「南洋鍼路図」(1598年、コルネリス・ドゥツゾーン)と「西洋鍼路図」(印度洋ノ部、大西洋西岸ノ部)の2件3点がリーフデ号でもたらされたものという説がある。
- 5) 泉井久之助他共訳『デ・サンデ天正遣欧使節記』対話二九、一五八五年七月 1969年 雄松堂、『大日本史料』第十一編別巻二のダニエル・バルトリ編耶蘇会史 京都への旅
- 6) 最近の調査においても、書かれている地名がポルトガル語からの音訳表記であること、ポルトガル船の航路を表記していることが確認されている。藤井謙治「一六世紀末における日本人の地理認識の転換」(紀平英作編『グローバル化時代の人文科学 上』京都大学学術出版会 2007年)
- 7) 中村拓「戦国時代の日本図」『横浜市立大学紀要 A-11 No.58』1957年、岡本良知『十六世紀における日本地図の発達』八木書店 1973年
- 8) ここで出てくるフェルメール作品の所蔵者を以下に記す。『兵士と笑う娘』(フリックコレクション、ニューヨーク)、『手紙を読む青衣の女』(アムステルダム国立美術館)、『リュートを弾く女』(メトロポリタン美術館)、『信仰の寓意』(メトロポリタン美術館)、『地理学者』(シュテューデル美術研究所、フランクフルト)、『天文学者』(ルーヴル美術館)、『恋人』(アムステルダム国立美術館)
- 9) 織田武雄「フェルメールと地図」(『古地図の博物誌』所収) 古今書院 1998年
- 10) 三好唯義「J.ブラウの1645/46年版世界地図について」『神戸市立博物館研究紀要』11号 1994年
- 11) ブラウ作「世界図」(1648年、203.0×300.9cm)、ブラウ作フィッセル改訂「世界図」(17世紀、204.5×300.0cm)
- 12) 新井白石著(村岡典嗣校訂)『西洋紀聞』岩波文庫 1936年
- 13) 高橋正「南蛮都市図屏風からカエリウス世界図へ」『絵図のコスモロジー 上』所収 地人書房 1988年
- 14) 高橋前掲 13
- 15) 佐野泰彦他訳『ジョアン・ロドリゲス 日本教会史 上』大航海時代叢書IX 岩波書店 1967年 151頁
- 16) 室賀信夫「新しい世界の認識」『探訪 大航海時代の日本』1 小学館 1978年(所収『古地図抄』東海大学出版会 1983年)
- 17) 日本人絵師によって天使として描かれていたものが、その後に羽が消され、その痕を周辺と同系色で彩色されたことが報告されている。太田彩「宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「萬国絵図屏風」の修理に伴う新発見について」(岡墨光堂『修復』5所載 1999年)
- 18) 高橋正「南蛮世界地図屏風研究小史補論」『待兼山論叢(日本学篇)』24号 1990年
- 19) 室賀前掲 16
- 20) 三好唯義「江戸時代の日本へ伝わったオランダ製壁地図」『関西大学博物館紀要』創刊号 1995年
- 21) 磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書』ゆまに書房 2004年 本書上巻の第一章第一節(二)ブラウの大型世界地図と新井白石に詳しい。